

# 「瀬戸内地方における技術職員の専門分野活動報告」実施報告

○河元 信幸<sup>a)</sup>、坂下 英樹<sup>b)</sup>、田村 義彦<sup>c)</sup>、玉谷 純二<sup>d)</sup>、北村 光夫<sup>d)</sup>、宮田 晃<sup>e)</sup>

a) 山口大学総合技術部、b) 広島大学技術センター、c) 岡山大学総合技術部

d) 徳島大学技術支援部、e) 愛媛大学技術職員協議会

## 1. はじめに

大学の技術職員は、教育・研究活動の円滑な運営を支える重要な役割を担っている。そして、教員や研究者と密接に連携しながら、実験・実習の準備、設備の管理・保守、研究支援など多岐にわたる業務を遂行しており、専門的な知識や高度な技術力に加え、教員や学生との円滑なコミュニケーション能力も求められる。

近年、大学を取り巻く環境は急速に変化しており、技術職員に求められる役割も多様化・高度化している。例えば、研究基盤の強化や先端設備の整備、データ管理やセキュリティ対策、さらには研究支援業務の拡大など、多岐にわたる課題への対応が求められている。一方で、限られた人員と予算の中で業務を遂行しなければならないという現実的な課題も浮かび上がっている。こうした状況の中、技術職員が業務の効率化やスキル向上を図るためには、広域的な人的ネットワークの活用が効率的かつ効果的であると考えられる。

本報告では、代表者コミュニティが主導する活動報告を通じて、技術職員の人的ネットワーク構築を支援する取り組みを紹介し、その成果と今後の課題について考察する。

## 2. 技術職員の課題解決に向けた取り組み

技術の進化に伴うスキルの更新、リソースの制約、安全基準や規制の厳格化など、技術職員を取り巻く課題は多岐にわたる。これらに対応するためには、最新の技術やベストプラクティスを共有し、自己研鑽に役立てることが重要である。しかし、既存の人的ネットワークは個人の裁量に依存しており、情報共有の範囲や質にばらつきがあることが課題となっている。

この課題を解決するため、大学技術職員組織の代表者を中心とした「代表者コミュニティ」が主体となり、人的ネットワークの構築支援を試みた。具体

的には、技術職員の平常業務に焦点を当てた活動報告をオンライン形式で開催し、参加者同士の知識共有を促進する形式を導入した。

この取り組みにより、技術職員は自身の専門分野に限らず幅広い知識を得ることが可能となり、業務の効率化とスキル向上が期待できる。また、成功事例だけでなく失敗事例も含めた報告を行い、実践的な知見の蓄積を促進した。さらに、オンライン形式を採用することで、地理的な制約を超えた情報共有が可能となり、より多くの技術職員が参加しやすい環境を実現した。

## 3. オンラインを活用した情報共有の実践と成果

技術職員の人的ネットワークの構築支援のため、オンラインでの専門分野活動報告を複数回にわたって実施した。この活動報告は、主催者、代表者コミュニティ、活動報告を行う個人若しくはグループ（以下、報告者と略す）、そして参加者の協力により成り立っている。それぞれの役割を時系列に沿って整理して表1に示す。

また、表2に今年度の活動報告の開催一覧を示す。当初は、分野を問わず技術職員組織で構成される専門分野を対象に実施する予定であったが、開催準備を進める中で、関連性の高い分野から着手する方が代表者コミュニティの連携が取りやすいとの意見から、初回は機械系分野から開始することとした。

機械系分野の活動報告では、所属先での業務内容や取り扱う機械の特性、日々の業務で生じる課題とその解決に向けた工夫事例などが共有された。報告者は、現場で直面した具体的な問題や、それを克服するための試行錯誤について詳細に説明し、参加者はそれぞれの立場から質問や意見を交わした。このような双方向のやり取りにより、技術職員同士が多様な視点から学び合い、自身の業務に役立つ知見を得る貴重な機会となった。

開催 No. IIIからは、開始時に参加していた5大学

に留まらず、より広く開催を周知した。また、専門分野活動報告の特性を活かし、技術職員組織を管理する立場からの報告や、技術発表会および技術研修のオンライン化など、従来にはない新たな取り組みも実施した。

オンライン形式での専門分野活動報告の実施は、従来個別に蓄積されがちだったノウハウを広く共有するきっかけとなり、参加者の業務効率向上につながることを期待できる。さらに、対面での情報交換が難しい状況下でも、オンラインを活用することで地理的制約が解消され、専門分野の垣根を超えて、より多くの技術職員が参加しやすくなったことも大きな成果である。これにより、多様な意見や知見が集まり、参加者間のつながりも一層強化される。

参加者からは、「他大学の技術職員の工夫を知ることができ、業務改善のヒントになった」「オンライン形式は参加しやすく、今後も継続的に実施してほしい」といった肯定的な意見が多く寄せられた。一方で、発表内容の標準化や、より効果的な情報共有手法の確立については今後の課題として挙げられ、さらなる改善に向けた取り組みが求められることも明らかとなった。

加えて、活動報告を通じて形成された「交流の場」は、技術職員同士の人的ネットワークを広げる重要な役割を担い、大学の枠を超えて情報交換や業務の課題を共有しながら解決策を模索するための基盤となることを期待できる。

代表者コミュニティは、こうしたネットワークを強化し、分野を越えた協力や知識共有を促進する取り組みを支援することが重要である。これにより、技術職員一人ひとりのスキル向上と業務効率化が図られ、大学の教育・研究活動をより強固に支えることが期待できる。

#### 4. おわりに

専門分野活動報告の運営体制は、主催者、代表者コミュニティ、報告者、そして参加者が相互に協力することで効率的に情報を共有することが可能となる。それぞれの役割が明確に分担され、全体の流れを通して、技術職員のスキル向上と実践的な知見の蓄積が促進されることが期待できる。この取り組みは、今後の人材育成の効果的な手法となることが考えられる。

活動報告を契機として、各大学の技術職員が連携

を深め、共に学び合う姿勢が醸成されたことは、今後の技術職員組織全体の発展に寄与する重要な成果であると考えられる。また、得られた知見や成功事例を学内で展開することで、大学全体の教育・研究基盤の強化にもつながることが期待される。

表1 活動報告の運営フローと役割分担

1. グループ募集と日程調整（主催者）
活動報告を実施するために報告を行いたい報告者を、代表者コミュニティを通じて募集する。報告者と日程調整を行い、オンライン活動報告の日程を確定とオンラインの設定。設定された情報を代表者コミュニティに連絡
2. オンライン情報の展開（代表者コミュニティ）
オンライン情報を学内展開
3. オンライン接続テストの実施（主催者）
活動報告に先立ち、オンライン接続テストを行い、事前に画面共有やシステムの動作確認を実施する。オンライン参加に不安のある参加者の視聴確認の実施。当日の報告が円滑に進行できるよう技術的な不安を解消
4. 活動報告の実施（報告者）
報告者は、設定された日時にオンラインで活動報告を実施（内容は専門とする分野、事例報告など）。活動報告には、成功事例や失敗事例が含まれ、参加者に対して実践的な知見が提供される
5. フィードバック（参加者）
活動報告後、参加者はアンケートに回答し、報告内容に対する意見や質問を提供する。これにより、次回の活動報告に向けた改善点や新たな要望が明らかになる。参加者のフィードバックは、今後の活動報告の質を向上させる
6. 次回の告知とアンケート結果の整理（主催者）
活動報告後、主催者は次回の開催予定日を告知し、アンケートへの回答依頼を実施。回答されたアンケートは、主催者が整理し、結果を代表者コミュニティに共有し、前回報告者に対して、質問やコメントへの対応を依頼

表2 活動報告の開催一覧

No	日程	専門分野[報告者]
I	6/17	機械系[山口大学総合技術部]
II	7/1	機械系[岡山大学総合技術部]
III	7/22	マネジメント系[岡山大学総合技術部]
IV	9/19	技術発表会[愛媛大学技術職員協議会]
V	9/30	機械系[広島大学技術センター]
VI	10/7	医工系[岡山大学総合技術部]
VII	11/11	情報系[山口大学総合技術部]
VIII	11/28	専門技術研修[山口大学総合技術部・岩手大学技術部]